

## 再現の昔

『それから』におけるロマンの(再)創出――

宮 本 陽 子

一

『それから』の物語は、東京で桜の咲き始める三月下旬頃から始まり、白百合の濃厚に香る部屋の中で雨音を聞く梅雨を経て、縁日で秋草が売られ、蝉の鳴く七月あたりで終わる。半年にも満たない間の物語である。しかし、その短い間に、「四五年前」、「三四年前」、あるいは「三年前」の出来事が何度も語りなおされ、それが「今の」(六章、一五一頁)<sup>(注1)</sup>主人公に大きな変化をもたらす物語でもある。

父親によって恩義と欲得の絡んだ政略結婚を準備され、同時に、かつての親友平岡夫妻の帰京を迎える、「今の」主人公長井代助にとって、「四五年前」や「三年前」というのは特権的な過去である。というのも、「四五年前」というのは、彼が今は亡き旧友、普沼の妹三千代に出会ったときであり、「三年前」という

のは、平岡と結婚した三千代が夫と共に京阪地方に発つのを新橋駅で見送った年だからである。つまり、思い出すべき過去とは、代助と三千代の過去の関係である。奇妙なことに、彼らの過去の関係は、思い出される毎に鮮やかに発展してゆく。過去が想起される度に現在の恋も強いものとなってゆく。石原千秋は、代助の「過去」の恋が「現在の関係」から逆算されたものである、と述べているが、<sup>(注2)</sup>屋上屋を架すことを恐れずにつけ加えるならば、「逆算された」過去が現在を変えてゆくことにもなっている。しかしなぜ、代助は何度も過去を想起しなければならぬのか。そもそも、彼らの恋愛はいつから始まったのか。

たしかに、物語のある時点において、代助と三千代はすでに深く愛し合っている。三千代の方はおそらく、代助が彼女と兄の暮らす家に通い始めたころから彼を愛していたに違いない。だからこそ、彼女は「隣りの部屋で黙つて兄と代助の話を聞いてゐた」のであり、「arbitr elegantiarum」と云ふ字を覚えた」

(十四、四一〇)のであろう。しかし、代助については、彼がいづから三千代を恋の対象として認識したのか判然としない。中山和子の主張するように、過去において、「三千代が代助のやみがたい愛の対象して存在したことは」<sup>(注3)</sup>なかつたのかもしれない。

こうした疑問が生ずるのは、『それから』において、いわゆる恋の一撃 (coup de foudre) の場面がないからだ。たとえば、マノン・レスコーの死によってすでに完結してしまつた恋をシユヴァリエ・デ・グリユーが一人称体で語る物語、『マノン・レスコー』においては、出会いがすなわち、恋の始まりである。デ・グリユーもやはり、恋のために父や兄と決裂し、約束されていたものをすべて失うことになる主人公である。哲学の課業を終え、父のもとで休暇を過ごそうとしていた十七歳のデ・グリユーは、マノンを一目見ただけで恋に落ちる。彼は語る、「甘美で熱いものがわたしの全身の血管を駆けめぐりました。いわば恋に我を忘れていたわたしは、しばらく声を出すことができず、この気持ちを眼で表す以外にありませんでした」<sup>(注4)</sup>。こうした恋の始まりを明確に記す決定的な瞬間が、『それから』には欠如している。「三千代と口を利き出したのは、どんな機会であつたか、今では(…)記憶に残つてゐない」(七)という代助は、それ以降も二人の関係を恋に転換する機会を持たないまま、平岡夫婦を見送り、そして今再び彼らを東京に迎えようとしている。わたしたちは、代助の「今」とそこから想起される過去を調

べながら、この明確な始まりを持たない恋について考察したい。

## 二

三千代が夫と共に京阪地方に移つてからの三年間、代助が三千代の不在を淋しく感じる日があつたとは思われない。代助は、「二週間前に突然」、平岡から「職業替」のために京阪地方を引き上げて帰京する、という手紙を貰つていたが、それ以前に、彼がアルバムを開いて三千代らしき女性の写真を見詰めたことはあつたのだろうか。そして、代助に会いにやつてきた平岡から、「細君はまだ貰わないのか」という質問を受けるときまで、かつて京阪地方へ向かう新婚の平岡の「眼鏡の裏に得意の色が羨ましい位動いた」のを見て、「急に此友達を憎らしく思った」ことを思い出したことはあつただろうか。「家に帰つて一日部屋へ這入つたなり考へ込んで」しまい、嫂と音楽会に出かける約束を反故にしたというのであるから、そのときの代助が幸せそうな平岡に嫉妬を感じたというは、後から作り上げた出来事ではないのはたしかであるが、そのことが必ずしも三千代への愛の証になるわけではないだろう。「殆ど兄弟の様に親しく往来」(二)してきた友達の仕事と妻を同時に得て、一人前の男として旅立つてゆくことに対する嫉妬と考えられなくもない。

三年前の代助にとっては、平岡に対する友情の方が三千代に

対する気持ちよりも親しいものだったのではないだろうか。帰京してからの三千代が初めて代助の家を訪ねるとき、結婚祝いに代助から贈られた指輪を嵌めている。この指輪と平岡が彼女に与えた時計を見た代助が思い出すのは、三千代との思い出というよりも、平岡との友情である。

代助は、一つ店で別々の品物を買った後、平岡と連れ立って其処の敷居を跨ぎながら互いに顔を見合せて笑つた事を記憶してゐる（四、九八―九九、傍線強調は宮本。以下同様）。

三千代の母と兄が相次いで亡くなった後、三千代は平岡と結婚した。平岡から「三千代を貰いたい」と打ち明けられた代助が、平岡に三千代を「周旋」したのだった。このとき、代助が三千代に対し、すでにいくばくかの愛情を抱いていたとしても、その愛情を「犠牲」にすることは「周旋」の価値をいっそう高めるものであれ、それを妨げるほどのものではなかった。この「周旋」に「犠牲」の意味をはつきりと見出すのは、代助が三千代を愛の対象として認識してからのことである。当時、この三人において、三千代と代助、あるいは三千代と平岡という異性関係よりも、代助と平岡という同性の友情の方が強固であり、三千代はこの男同士の友情の記念品として、一人の男からもう一人の男に「周旋」されたと言ふべきであろう。指輪も時計もしたがって、そもそもは代助と平岡の友情の印であったはずだ。

もちろん、代助と京阪地方にいる平岡の文通が疎遠になっていた間も、「ある事情があつて」、代助が平岡のことを「時々思ひ出す」、「今頃は何うして暮らしてゐるだろうと、色々に想像して見る事がある」（二）という記述がすでにあり、ここにおいて「ある事情」が三千代のことであることは明白であるが、しかし、代助がアルバムの写真を見詰めるのも、平岡夫妻を見送つた当時のことを思い出すのも、「ある事情」のことを考えるのも、すべて、平岡の婦京が「栄転」ではなく、「職業替」のためであるという事情を知つてからの記述である。つまり、二週間前に届いた平岡からの手紙によって、彼ら夫妻の生活が思わしくないといいたいことを知つてから、初めて、代助は三千代のことを考えるようになり、彼女と自分の間に何らかの関係があつたように想定し始めるのである。

代助が三千代を愛するためには、どうしても三千代は不幸でなければならなかつた。代助は不幸な三千代が好きなのである。「紙の指輪」として二度目に金を与えた後、三千代と再会した代助は考える。

同時に代助の三千代に対する愛情は、此夫婦の現在の関係を、必須条件として募りつゝある事もまた一方では否み切れなかつた。三千代が平岡に嫁ぐ前、代助の三千代の間柄は、どの程度迄進んでゐたかは、しばらく措くとしても、彼は現在の三千代に決して無頓着である訳に行かなかつた。

彼は病気に冒された三千代をたゞの昔の三千代よりは気の毒に思つた。彼は子供を亡くした三千代を只の昔の三千代よりは気の毒に思つた。彼は夫の愛を失ひつゝある三千代をたゞの昔の三千代よりは気の毒に思つた。彼は生活難に苦しみつゝある三千代をたゞの昔の三千代よりは気の毒に思つた(十三、三四七)。

ここにおいて、本当に比較するべきは「たゞの昔の三千代」の「三千代」と「現在の三千代」ではない。不幸でない三千代と、不幸な三千代である。代助は「病に冒され」、「子供を亡くし」、「夫の愛を失い」、「生活難に苦しみつゝある三千代」を愛しているのだということを確認しておこう。しかし、じつさい、中山和子も指摘する<sup>(注5)</sup>とおり、三千代は兄と母を相次いで失い、残された父も三千代の結婚直後、「思はざるある事情のために余儀なくされて」(七、一七三)北海道に行つてしまった。三千代の父は「かつて多少の財産家と称へられるべき田畠の所有者であつた」が、「日露戦争の当時、人の勧めに應じて、株に手を出して全く遣り損なつてから、潔く祖先の地を売り払つて、北海道へ渡つたのである」(十三、三四九)。つまり、「昔の三千代」も、充分に不幸であつたはずである。それではなぜ、昔の代助は「昔の三千代」を愛さなかつたのか。なぜ昔の代助は三千代の不幸に無頓着だつたのか。これはすなわち、三千代の不幸というものが代助の愛にとつて絶対必要条件であり、不幸の増加が愛

の増加を保証するとしても、不幸だけでは愛するに足りない、あるいは、足りなかつたということである。

さて、「現在の三千代」の不幸に心を動かされた代助は、その後すぐ、追いつちをかけられるように、北海道にいる三千代の父の経済的窮状を三千代から知らされ、彼女への思いをいっそう掻き立てられるが、「今一步と云ふ際どい所で、踏み留まり、三千代の家を退出する。帰り道、彼は三千代のことを思いながら、先の引用部の考えを訂正する。つまり、「自分と三千代との現在の関係」を「昔」からのものに設定しなおす。

自分と三千代との現在の関係は、此前逢つた時、既に發展してゐたのだと思ひ出した。否、其前逢つた時既にと、思ひ出した。代助は二人の過去を順次に遡つて見ていづれの断面にも、二人の間に燃える愛の炎を見出さぬ事はなかつた。必竟は、三千代が平岡に嫁ぐ前、既に自分に嫁いでいたも同じ事だと考え詰めた時、彼は耐えがたき重いものを、胸の中に投げ込まれた(十三、三五三〜三五四)。

こうして、代助は自分と三千代の愛の始まりを平岡との結婚以前に設定する。それでも平岡から三千代を奪う決意のつかない代助は、「平岡夫婦を三年前の夫婦にして、それを便に、自分を三千代から永く振り放そうする最後の試み」(十三、三六四)として、平岡に家庭を大切にしよう説得し、失敗する。

代助がようやく三千代を選びとる決意をするのは、百合の香

る部屋で三千代に愛の告白をし、彼女と結ばれ、父に縁談を断わってからのことである。彼は先の例では、平岡夫婦の仲を修復し、自分は三千代と別れようと思うに至るきっかけになった、同じ事由、すなわち、「三千代が平岡に嫁ぐ前、既に自分に嫁いでいたも同じ」であったという事由を、今度は逆に、平岡から三千代を奪うために用いる。ここにおいて、代助はこの「嫁ぐ前、既に」という設定を「思い出した」＝思い始めた、あるいは「考え詰めた」のではなく、既成事実として語る。彼は平岡を呼び出してまず言う、「君は三千代さんを愛してゐなかつた」。それから、彼は三千代に対する自分の思いを平岡に打ち明ける、「僕は三千代さんを愛してゐる」。そしてついに、代助がかつて自分に三千代を「周旋」してくれたことと代助の告白との矛盾を問う平岡に対し、彼は「周旋」した時よりも古い過去に遡って、主張する、「僕は君より前から三千代さんを愛してゐたのだよ」(十六、四七九～四八二)。逆算された「過去の関係」の設定が現実の関係を発展させるために用いられ、さらに、説明まで与えられる。代助によれば、そのときは「義侠心」のために、「自然」、すなわち愛を「友情」(十六、四八二～四八四)の犠牲にしてしまった、というのである。

ところで、彼が三千代を平岡に「周旋」したのは三年前であつたが、三千代が代助を最初に訪問し、代助が兄から平岡のための借金を断られたあと、彼は「三四年の自分を回顧し」、

「自己」の道念を誇張して、得意に使ひ回してゐた」と考える。彼はこの過去の「道念」の大半は父が彼に「捺摺付けた」「鍍金」であり、彼はそれを「全く彼自身に特有の思索と観察の力によつて、次第々々に(…)自分で剥がしてきた」。したがつて、今の彼が「地金」(六、一五一)だといふのである。「三四年前の自分」と今の自分が違い、「義侠心」や「道念」にしたがつて行動した自分が「鍍金」であり、父親の教育の結果であり、現在の自分を「地金」として肯定する考え方は、婚姻という制度に対して、「自然」＝愛を対峙させ、愛に生きることを「自然の昔に帰るんだ」(十四、四〇二)とする論法にとつて甚だ都合がよい。つまり、平岡から三千代を奪つても現在の愛を実現すること、「鍍金を剥がして」「地金」に戻ること、「自然の昔に帰る」こと、これらすべてがひとつになると、代助の「過去」と「現在」がきれいにつながる。百合の香りの「嗅覚の刺激のうち」、三千代の過去を分明に認め、「其過去に離すべからず、わが昔の影」を「煙の如く這い纏つは」らせながら、彼は思う、「何故もつと早く帰る事が出来なかつたのか」、「始めから何故自然に抵抗したのか」。起源を知らない愛に、代助はこうして、父の教育や社会の制度に先行する「自然の昔」という絶対的な起源を与えることで正当化しようとする。

## 三

代助と三千代の愛の起源を「自然の昔」に求めるといふ代助の主張には、これまで見てきたように、かなり無理があるとしても、比喩としてはたいそう美しい。デ・グリユーやマノンのように過去を思い煩う必要のない十六、七歳の少年少女時代から、もはや遠く離れ、それぞれしがらみを抱えた男女、しかも青春時代の一時期を共有した男女が新たに愛し合うために、こうした比喩を援用しようとするのは、とりわけ、姦通が当時の社会において持ちうる意味を考慮するならば、不誠実というよりも、切実な願望とみなすべきかもしれない。

漱石が『それから』を「朝日新聞」に掲載するおよそ百五十年前に、ジャン・ジャック・ルソーは「もはや存在せず、おそらく存在したこともなく、たしかに将来も決して存在しないようなひとつの状態<sup>(注6)</sup>」として自然状態を想定し、また、知識や習慣によって「変質する以前の性向<sup>(注7)</sup>、すなわち人間が「もって生まれてくる感覚」を「内なる自然<sup>(注7)</sup>」と呼んでいる。吉田精一によれば、ルソーについては、明治十年代と二十年代に『学問芸術論』、『社会契約論』、『告白』などが翻訳されたものの、三十年代中期には、「自然」、あるいは「自然に帰れ」という主張がルソーの名と共に云々されただけで、そのもとになった『不平

等起源論』はほとんど読まれることはなかった、ということである<sup>(注8)</sup>。したがって、漱石がじっさいに『不平等起源論』や『エミール』を読んだという可能性は薄いものの、ルソーがその片鱗なりとも日本で紹介された以降の人間として、彼は「自然」に託されたルソーの愛惜の念、憧憬の念は知っていたかもしれない。少なくとも、「現代の社会は孤立した人間の集合体に過ぎず、「文明は我等をして孤立せしむるものだ」(八、二二三)、という代助の文明批判の背後にはルソーの声が響いているように思われる。

いずれにしても、代助は「自然の昔」というこの上なく美しい比喩を、あたかも自明の理であるかのように唱えることによって、二人の愛を理想化しようとする。それはまた、彼らの愛が代助の願うようには、絶対的で無邪気な愛ではない、ということでもある。

すでに前章で見てきたように、代助が三千代に惹かれ始めるのは、三千代の不幸に気づいてからである。代助は三千代が結婚する以前も、結婚した後も、これまでさんざん、見合いをし、縁談を断ってきた男である。代助は三千代から亡くした子供の着物をわざわざ見せられた(六、一四八)後、兄から断られた平岡夫妻のための借金を嫂に借りようとして、彼女からも断られる。嫂は借金を断りながら、父の勧める縁談を受け入れるよう代助に執拗に迫り、そして言う、「それぢや誰か好きなのがあ

るんでせう。其の方の名を仰しゃい」。こう言われたとき、「今迄嫁の候補者としては、たゞの一人も好いた女を頭の中に指名して居た覚がなかった」代助の心に、「どう云ふ訳か、三千代といふ名が（…）浮か」（七、一八六―一八七）ぶ。つまり、三千代と知り合った四五年前からずっと、嫂からこうした誘導尋問のような質問をされるこのときまで、「たゞの」一度も、三千代を結婚の「候補者」としての「好いた女」として意識したことがなかったということである。代助の愛は「嫂の肉薄」と「三千代の引力」（十二、三〇三）がなければ先に進まない。三千代の不幸だけではやはり足りないのである。

「嫂の肉薄」とはすなわち、実家からの圧力である。しかし、すでに述べたように、代助はこれまで何度も、縁談を迫られては断ってきた。また、代助は「親の金とも、兄の金ともつかぬものを使って生きてゐる」（三、四八）人間であるが、それもこれまでと同様である。なぜ今回だけ「嫂の肉薄を恐れ」なければならぬのか。

興味深いことに、代助が父、長井得に呼び出され、最初に長井本家を訪れたとき、得は代助に縁談を勧めようとしているにも関わらず、縁談については言及しない。得は自分が「もう何時死ぬか分からない」し、代助も「もう三十」なのだから、「何か為<sup>す</sup>」（三、六一―六二）ように、と言うのみである。また、最終的に代助が父に縁談を断り、父が「もうお前の世話はせん

から」（十五、四四三）と怒ってしまふ会見において、父が最初に言うのは、「己も大分年を取つてな」（十五、四三七）、という言葉である。これはすなわち、縁談を契機に、父が一家の次男である代助の切り離しを考えている、と判断するべきであろう。得がそろそろ引退を考へる年齢になっている一方、長男誠吾の長男、誠太郎が十五歳、すなわち、長井家代々の跡取りとして充分な年齢に成長している。長井家はひとつの転換期を迎えようとしているのだ。石原千秋がいみじくも指摘しているように、「もう三十」の長井代助は「跡取りの代わり<sup>スベアー</sup>としての役割を終えつつある」<sup>（注中）</sup>。「行人」において、長野家の世代交代に伴い、「厄介もの」（『行人』七）となった下女のお貞や娘のお重が、長野家から切り離そうとされるのと同様、「役割を終えつつある」代助も、そろそろ、長井家から切り離されなければならない。

しかも、今回の縁談の相手は金満家の娘であるから長井家の経済的な支えとなりうるという利点に、代助の父、得の「命の親に当る人の血統を受けたもの」との縁組であるから、「幾分か恩が返せる」という「恩返し」も加わり、かつて武士であった得の「義理堅い」（七、一八四）儒教的価値観と、実業家である現在の得の功利主義の両方を満足させることができる。この縁談を実現させ、長井家を離れることで、代助は次男として最後の、そして最大の「役割」をまっとうすることになるはずであった。しかし、代助にはこの「役割」が分かっていない。少

なくとも、自分が「役割を終えつつある」ことを了解していない。

代助はそもそも、父がこれまで彼に施した教育を、「代助が生れ落ちるや否や、此親爺が代助に向かつて作ったプログラム」(三、五六)の一環であると了解しつつも、「プログラム」の意味を理解していなかった。この「プログラム」が、長井家存続のための次男、「跡取りの代わり<sup>スベアー</sup>」としてのプログラムであるということを理解していなかった。

彼は「今迄は父や嫂を相手に、好い加減な間隔を取つて、柔かに自我を通して来た」(十四、三九四)と考えているが、彼の「柔かな自我」が可能だったのはこの「プログラム」を外れない限りにおいてであった。その遂行を妨げない限り、代助が何をしようと、何を考えようと、父は「驚く程寛大」(三三)である。やがては家督を継ぐことになる兄誠吾も、代助が父のこしらえた「プログラム」を踏み外さない限りは、「主義だとか、主張だとか、人生観だとか云ふ窮屈ものは、てんで、これつ許も口にしないんだから」、いっそ「代助には有難い」(五、一一九)。代助が「芸者買をし過ぎ」た際には、文句も言わず、「綺麗に借金を払ってくれた」(五)程である。しかし、代助は兄のこうした「寛大さ」も長井家存続のための「プログラム」の許容範囲内にあることを理解していない。だからこそ、「芸者買」の「借金を払ってくれた」兄が、旧来の友である平岡の借金を払うた

めの金を出してくれないのを代助は理解できない。長井家の次男に過ぎず、独立の生計を立てていない代助には、他家の存亡のために長井家の財産を使う権利はない。兄に断られた翌朝、代助は考える。

そんなら今茲で平岡の為に判を押して、連借でもしたら、何うするだろう。矢つ張り彼の<sup>あ</sup>時の様に綺麗に片付けて呉れるだらうか。兄は自分が其処迄考へてみて断つたんだらうか。或は自分がそんな無理なことはしないものと初めから安心して貸さないのかしらん(六、一三二)。

話者はここで代助を主語とした自由間接話法発話を用いることで、代助の大きな勘違いをくつきりとあぶり出す。

最終章において、兄が三千代と代助の関係を暴く平岡からの手紙を携え、代助に絶交を言い渡しにやってくるが、代助の「不始末」に対する兄の感想は、「今迄折角金を使つた甲斐がないぢやないか」、「今日迄何の為に教育を受けたのだ」(十七)、というこの二点に集約されるだろう。代助に与えられた「金」も「教育」もすべて、「プログラム」の遂行のために費やされてきたのであるから。

いずれにしても、代助は長井家における自らのステイタスを誤認したまま、それでも、身に迫ってくる居心地の悪さを感じ、これを「嫂の肉薄」として恐れる。代助には眼の前に差し出された、佐川の令嬢との政略結婚は見えるが、その根底で囮られ



ている長井家からの切り離しという、より大きな変動を見抜くことはできない。切り離しという動機が今回の縁談を差し迫ったものに行っていることを彼は理解していない。ただ、父や兄、嫂と会うたびに、「肉薄」してくるものを感じ、恐れるばかりである。じっさい、佐川の令嬢との縁談の推進がそこから逃れようとする代助を三千代に近づけるとも言えるであろう。佐川の令嬢と歌舞伎座で引き会わされ（十一）、実家の食事に同席させられ（十二）、さらに京都に帰る彼女の送りまで付き合わされた（十三）後で、代助は、「三千代が平岡に嫁ぐ前、既に自分に嫁いでゐたも同じ事だと考え詰め」（十三、三五四）るのであり、嫂の梅子に「縁談を断ろうと思う」（十四、三八六）と述べ、「私は好いた女があるんです」（十四、三九一）と明言することができるとだ。

「劇を軽蔑してゐる様」で、「小説も」まったく読まないという（十二、三二六）佐川の令嬢、見送りの代助たちに汽車の「窓のなかで叮嚀に会釈したが、窓の外へは別段の言葉も聞こえない」（十三、三三三）佐川の令嬢は、要するに、代助とは何ら共通の世界を持たず、彼の心に訴える言葉を持たない存在である。こうした女との結婚を押しつけられることで、代助は三千代の方に一層、引き寄せられる。三千代は、あたかも佐川の令嬢のそっけなさに差をつけるかのように、代助を送り出しながら、「淋しくて不可ないから、又来て頂戴」（十三、三五二）と

言う。

テクストは二人の女の差異を対比として明示することはしないが、代助には対照的に映ったであろう、少なくとも、佐川の令嬢が「三千代の引力」をひき立てたであろうと予想させるように物語を進めてゆく。

ところで、代助に人生におけるひとつの転機を迫り、「肉薄」してくるのは、父や兄、嫂だけではない。兄の息子、誠太郎まで「叔父さん、奥さんは何時貰ふんですか」（十一、二八六）（十二、三〇七）という質問を二度も繰り返す。彼の周囲には「肉薄」する言説が溢れている。代助の家では、彼の留守中は、婆さんが門野に言っている、「まあ奥様でも御貰ひになつてから、緩つくり、御役でも御探しなさる御積りなんでせうよ」（一、一五）。帰京した平岡が代助に会つてすぐ、四つ目にする質問が「細君はまだ貰わないのかい」（二、三〇）である。そして、別れ際に、平岡は「妻が頻りに、君はもう奥さんを持つたらうか、未だらうかつて気にしてゐたぜ」（二、四六）という言葉を残して立ち去る。さらにまた、縁談も三千代との関係もかなり進んできたとき、「今一步と云ふ際どい所で、踏み留まつ」（十三、三五二）ている代助に対して、三千代が問うのも同じ質問である、「何だつて、まだ奥さんを御貰ひにならないの」（十三、三五〇）。

こうした言説に「肉薄」される以前の代助、すなわち物語冒

頭の代助は、小さく自己充足した世界に生きていた。朝の床の中で自らの鋭敏な感覚が捉える生を心ゆくまで味わうことができた。平岡夫妻の窮乏も佐川の令嬢との縁談も、まだ身近に迫っていない代助にとって、生きるということの意味は、彼自身の身体とその感覚が直接及ぶ範囲に集中していた。自身の感覚こそが生命の証であった。そのため、彼の身体的感覚が捉えたものは異様な大きさに拡大される。新聞配達らしき者の足音は、代助の頭の中に空からぶら下がる「大きな組下駄」の図像を結び、前の晩、彼の枕元の畳の上に落ちた八重樫の音は、「護謨毯を天井裏から投げ付けた程」(一、六)の音として反芻される。新聞には「男が女を斬つてゐる絵」や「学校騒動」の記事が載っているが、このときの彼にとっては遠く小さな出来事だ。やがて、新聞社に勤務することになる平岡も、まだやって来ない。三千代をまだはつきりと愛していない代助にとって心配するべきは自分の命だけだ。「生きたがる男」代助は、胸に手を押し当てて、掌の下を脈打つ命の鼓動を確かめてみる。手を無理に伸ばしてみる必要はない。

代助の手は、まず何よりも、「叮嚀に」歯を磨いたり、「綺麗に」胸と背を摩擦したり、「丸で女がお白粉を付ける時の手付」と同じように、頬を「両手で両三度撫で」たり、要するに、美しい自分の身体を愛するためにあるようだ。じっさい、「肉体に誇りを置く人」である彼は「歯並」の好きさ、皮膚の「光沢」、

「油を塗けないでも面白い程自由になる」髪、「細く且初々しく、口の上を品よく蔽ふている」髭、「ふつくらした頬」に満足している。鏡の前に立つ代助を背後から覗き込むように描写する話者は、代助の視点から鏡の映像を眺めるふりをしながら、「それ程彼は旧時代の日本を乗り超えている」(二)という、この段落最後の一文に、代助の誇りと満足度を背後で笑うまなざしの存在を覗かせる。

紅茶にバター・トーストという当時としてはまだ珍しい朝食を済ませた代助の優雅な朝を妨げる雑音は、さしあたり、書生、門野の「荒縄で組みたてられた」ような神経だけである。代助は門野の粗雑さを迷惑がりつつも、これを、「高尚な教育の彼岸に起る反響の苦痛」、あるいは「天爵的に貴族になつた報いに受ける不文の刑罰である」として引き受ける。それどころか、こうした「犠牲に甘んずればこそ、自分は今の自分に為れた」(二)、とさえ思うほどである。要するに、この小さな世界から追いたてられる心配がない限り、彼は「職業の為に汚されない内容の多い時間を有する、上等人種と自分を考へ」(三、六二)続けることができたはずであり、他者を必要としなかったはずである。彼が三千代の不幸に気づき、彼女に自分が必要だと思ふためには、彼自身が自己充足した世界から出る必要に迫られなければならないのだ。

だからこそ、当初、彼は三千代との愛に積極的に向かつてゆ

くことはなかった。彼の愛はその周囲にある状況に迫られて進展する以外にない。つまり、彼にとつて父の強い結婚<sup>II</sup>家からの切り離しから逃れることが三千代の方に近づくことになっている。平岡夫妻のための借金を兄から断られた代助は、風呂上りの頭で、父から勧められている結婚から逃げることを考えているうちに、平岡のことが気になりだす。しかし、「夫を能く煎じ詰めて見ると、平岡のことではない、矢張り三千代の事が気に掛かる」。こうして横滑りに思考が三千代に向けられたあと、彼はこの思いを「別段不徳義とは感じな」と考える（七、一六九）。つまり、異性に対する愛情として認識しようとしな

そのため、このあとすぐに続く三千代との思い出は、三千代の兄と平岡と代助との交際の中に置かれている。

三千代は兄と此二人（平岡と代助）に食付いて、時々池之端杯を散歩した事がある。四人は此関係で約二年足らず過ぎた（七、一七一）。

四人の関係については具体的な説明がないが、このときの代助は自分と三千代の関係よりも、男三人の付き合いに「食付いてくる妹という図式で四人の関係を要約したかったのであろう。

同様に、代助が縁談を嫂に断ることが、三千代への愛の告白にシフトする。そして、このときもまた、代助は三千代との過去を想起するが、平岡の存在はそこにない。三千代とその兄と代助の三人の関係になっている。そして、先の四人の思い出の

ときは、「修業の為と号して」（七、一七〇）国から連れてきた妹が、今度は、「教育しなければならぬと云ふ義務の念からではなくて、全く妹の未来に対する情合と、現在自分の傍に引き着けて置きたい欲望から」（十四、四〇九）連れてこられたことになっている。そして代助も「此計画」を打ち明けられ、「多大の好奇心を以つて」これを迎えた、とされている。

兄の計画のなかには、「妹の未来」という言葉からも予想されるとおり、三千代と代助の結婚が入っていたらしい。これはおそらく、菅沼家長男としての兄の計画と考えるべきであろう。だからこそ、資産もなく、「あまり出来の可い方ぢやなかつた」

（三、六五）平岡よりも、資産家の次男で、「学校の成績も可なりだつた」（三、六四）代助を、兄は選んだのである。平岡はまず、菅沼によって妹の結婚問題から排除されていたのである。

三千代も兄の意思に同意していたようだ。代助は兄が「生存中に此意味を私に三千代に漏らした事があるかどうか（…）知らなかつた」が、少なくとも、当時の代助は彼女の「挙止動作と言語談話から特別な感じを得た」という。この「特別な感じ」の意味を当時の代助はしかし、認めたくなかつたようだ。彼はあたかも、事後的に「此意味」が分かつたかのようなふりをす。 「兄が死んだ後で、当時を振り返つて見る毎に、代助は一種の意味を認めない訳に行かなかつた」。要するに、当時の彼は兄が「死ぬ時迄それを明言しなかつた」のを好いことに、「敢て何

事も語ら(十四、四一〇)ず、意味を宙吊りにしたまま、三代を引き受けることから逃げたのである。そして今、ようやく、代助は「一種の意味」を明確にし、それを引き受けようという気になったのだ。

こうした奇妙な情報の変化は、もちろん、代助と三代の「現在の関係」から「逆算された」結果に違いないが、しかし、ここで注目すべきは、愛を告白しようというこの期に及んで、彼が過去における三代との関係を自分の積極的な愛情に基づかせるのではなく、三代の兄の計画に基づかせることである。結婚を望んでいたのは代助よりも普沼兄妹であつたと暗に示していることである。そう、代助が考えていることである。

また、さらにここでは、代助が兄に依頼されて、「趣味に関する三代の教育」を引き受け、「後から顧みると、自ら進んで其任に当たつたと思われる痕跡があつた」(十四、四一一)ことが語られる一方で、「三代が来てから後、兄と代助は益々親しく」(十四、四〇九)なり、「三人は(…)巴の如くに回転しつゝ、進んで行つた」(十四、四一二)とすることで、今度は、平岡を除く代助と兄の友情に三代が付加えられる形で、やはり男性同士の友情が強調される。とりわけ、「遂に三巴が一所に寄つて、丸い円にならうとする少し前の所で、忽然其一つが欠けた為、残る二つは平衡を失つた」(十四、四一二)、という彼女の兄の死についての記述は、代助と兄の友情の深さと強調す

る一方で、三代との付き合いは彼女の兄との友情の単なる付録に過ぎなかつたことを暴くものである。すでに前章で、「二人の過去を順次に溯つて見ていづれの断面にも、二人の間に燃える愛の炎を見出さなかつた」と思ひ始め、「三代が平岡に嫁ぐ前、既に自分に嫁いでいたも同じ事だ」(十三、三五四)、と考えた代助の「愛の炎」や「既に自分に嫁いでいた」との意味は、彼女の兄との友情の強さに及ばないのであろうか。これはすなわち、代助の三代に対する愛は一挙に自力で「自然の昔に帰る」(十四、四〇二)のではなく、ためらいながら、幾分否定されながら、それでも少しづつ、さまざまな外的要因に助けられて自らを肯定してゆくことである。

#### 四

代助の愛がこのように歯切れの悪いものであるのに対し、三代の愛はむしろはっきりと積極的である。まるで、代助のどこに訴えれば、彼を惹きつけることができるか心得ているかのようにである。

代助を最初に訪問したときに、彼女が開口一番に語るのは自分の病氣の話であるが、その話を聞くことで、代助は、「三代が細君にならない前」の「眼遣い」(四、九五)を現在の三代に見いだす。代助の前に腰を掛けた彼女は膝の上に手を重ねる

が、「上にした手に」(四、九六)は、彼から贈られた真珠の指輪を嵌めている。また、代助が平岡夫妻の新居を訪れた際、三千代が、「坐ると共に、前に置いて(…)見せ」(六、一四八)るのは、行李の底から出してきた死んだ子供の着物である。さらに、銀杏返しの髪型、かつて代助が三千代の兄の家で活けたという白百合(十、二五二)、「代助の前に広げて見せ」る指輪の消えた指(十二、三二二)、「世の中を憚る様に、(…)用筆筒に仕舞」われる「記念の指輪」(十三、三四五)、窮乏を訴える父の手紙(十四、三四八〜三四九)など、思い出の品々と不幸の証が代助の前にぞろぞろと差し出され、それらを代助はおそらくは彼女が望むように次々に解説してゆく。すなわち、代助はそうした品々を提示されることで、まるでスイッチを押されるように、二人の愛を過去に溯らせてゆく。じっさいは、代助にとって「そんな事があつた様にも」(十、二五九)思う程度の曖昧な思い出の品のひとつに過ぎなかつた白百合も、やがては愛の告白をする部屋に代助によって新たに用意され、二人の愛の記憶を「自然の愛」として永遠のものにするために捧げられるだろう。

もちろん、自分の愛している人、その人から愛されたいと願っている人の前で、その人を惹きつけようとするのはごく自然なことであろう。しかし、再会後の三千代は昔の三千代以上に代助を愛しているだけではなく、昔の三千代以上に不幸で経

済的支援を必要としている。代助は今の彼女にとって愛しい人であると同時に、経済的に助けてくれるという意味でも、なくてはならない人になっている。「紙の指輪」(十二、三二二)を与えてくれる人でもある。そしてまた、三千代を助けること、三千代が必要としているものを与えることが、代助にとっては喜びであり、愛の証となる。彼らの愛は金銭に動機づけられるものではないが、金銭のやり取りが二人の交際の口実になっていることも否めない。

じっさい、三千代が最初に訪問するのは、代助に「御金の工面」(四、一〇〇)を頼むためである。このとき、三千代は最後に経済的困難の理由を説明しながら、夫の放蕩を匂わせる。さらに、代助が小切手を届けに三千代のもとを訪れたときも、三千代は小切手を受け取りながら、今度は、経済的困難の原因が平岡の放蕩にあることをはっきりと語る。そして平岡の放蕩の原因が、三千代の病気にあり、彼女が性生活に耐えられないことが仄めかされる(八、二〇五〜二〇六)。代助と三千代の間には、金銭と性を直接結びつけるものはないが、しかし、代助が三千代に金銭を与えることが、平岡夫婦の性をあぶりだすきっかけになつてゐることは否めない。代助は金銭によって彼女を性的に所有しようとはしないが、しかし、彼女が性的に夫に所有されていないことを、金銭を与えることで確認することができる。彼が三千代に「紙の指輪」(十二、三二二)、すなわち、

紙幣を差し出したのも、彼女が指輪を質に入れたことが分かったからだけではなく、夜、一人きりで夕刊を「二遍」(十二、三一〇)も読んでいるという彼女の姿に、夫に等閑にされた妻の姿を見たからである。<sup>(注10)</sup> 三千代に「紙の指輪」を受け取らせた後、彼女の家を出た代助は、「美しい夢を見た様に、暗い夜を切つて歩」(十二、三二三)く。恋の一夜を過ごした後の若者のように、彼は高揚している。

三千代の帰京後も何度か待合に出かける代助は、もちろん、平岡同様、性的快楽そのものを否定しているわけではない。嫂に結婚を迫られ、拒否しようとしたときに、代助の頭に浮かぶのは、「生涯一人でいるか、或は妾を置いて暮らすか、或は芸者と関係をつけるか」(七、一八五)、という選択肢である。じつさい、家からの切り離しを考えている父が妾を置くことを許すか否かは別に、後者二つは、代助が結婚しようとするまいと、両立可能である。彼にとっては、父の勧める妻も妾も芸者も、情愛とは無縁の性を営む相手であるという点において大差はない。そのうえ、父の勧めにしたがえば、「金は取らんでも構はない」(三、六一)わけであるから、結婚を承諾することでむしろ、彼自身が妾のような立場になる。いずれにしても性と金銭の交換システムの問題であり、代助にとっては感情の問題ではない。<sup>(注11)</sup>

とはいえ、すでに見たように、三千代との関係に金銭が無縁

なわけではない。本来ならば、夫が家庭にもたらすべき金銭を三千代のもとに届ける代助は、いわば、夫の三千代に対する非所有に金を払っているようなものである。ここで仮に、代助が彼女から性的報酬を受け取ったならば、三千代との関係も性と金銭の交換システムのなかに組み込まれてしまう。三千代に金銭を与える以上、そして、彼女を愛している以上、代助は彼女を抱くことができない。代助の芸者通いはしたがたって、三千代に対する性愛の代理というよりも、むしろ、抱くことのできない女としての三千代を際立たせるものである。

三千代との関係を別にしても、本来、代助は感情の問題、すなわち、恋愛から性をむしろ排除しようとする。彼は「煤煙」という新聞小説から感じられる「肉の臭い」(六、一三三)、すなわち肉欲を厭わしく思い、この対極に「誠の愛」(六、一三七)を置く。彼はまた、「西洋の小説」に「出て来る男女の情話」が、あまりに露骨で、あまりに放肆で、且あまりに直線的に濃厚(十三、三五〇)であることに批判的である。代助は文学において、恋愛においても性を凝視することを忌避する。要するに、性は沈黙思考や観察の対象から外されるべきものとなっている。自分の下半身を凝視することすら代助には堪えられない。彼は風呂場で自分の足を見て、「実に見るに堪えない程醜い」(七、一六八)と思うことがある。自らの上半身の美しさを誇り、それを愛でる代助が、自分の下半身にはまるで潔癖症の

少女が異物を前にしたときのような嫌悪感を抱く。

彼が好んで熟視する性があるとすれば、人間の性ではなく、アマランスの生殖器、すなわち雄蕊と雌蕊である。彼はそれらを熱心に交配させようとさえる(四、八七)。彼の手が求めるのは、自分の上半身と植物であり、異性の身体ではない。愛する三千代の身体においても、彼の手は彼女の手首を掴むだけである。だからこそ、代助は昔の三千代、つまり抱くことのできた健康な三千代よりも、現在の抱くことのできない病気の三千代、夫にも抱かれることのない三千代、いわば下半身のない三千代が好きなのである。とりわけ、「有夫姦」(六、一三五)という禍々しい響きを持った言葉が処罰の対象として有効であった時代において、代助は三千代との「自然の愛」から男女の性を排除しようと望む。

そうして其償いには自然の愛が残る丈である。其愛の対象は他人の細君であった(十三、三三六)。

鈴蘭と同じ水を飲み、「永く生きられる身体」(十六、四五七)を持たない三千代は、代助にとつて限りなく花に近い存在である。三千代が代助の家に白百合を携えてくるのは、もちろん、代助に過去を美しく想起させるためであるが、同時に、自らの自己イメージをこの花に託そうとしたのであろう。フランス語では純白の百合を、「*l'is virginale*」と呼び、純潔、無垢、無邪気、美徳の象徴とする。はかなく清らかでありながら、いつまでも

消し去ることのできない濃厚な匂いを持つ純白の百合が、三千代の病んだ身体と社会から決して祝福されることのない愛を浄化してくれるはずである。

## 五

未来のない恋を生きる二人は、こうしてイメージや比喩に寄りかかりながら、過去に美しい物語ロマンを積み上げてゆく。この物語を可能にするために、彼らの現在は崩れてゆく。

桜の季節には、「細緻な思索力と鋭敏な感応性」(一、二二)を誇っていた代助であったが、季節がだいぶ夏らしくなってきた頃、少なくとも「三年前」よりは新しいはずの「余程前に外国に注文した二三の新刊書」が代助に届いた時、代助はそのうちの一冊については、「其名前さへ忘れてゐた」(傍線強調は宮本、以下同様)(十一)。さらに、それからおよそ一週間後、代助は「かねてから読み掛けてある洋書を、葉の挟みである所で開けて見ると、前後の関係を丸で忘れてゐた」。この後すぐに、代助がかつていかに読書家であったかが説明され、「ある時は読書そのものが、唯一なる自己の本領の様な気がした」という一文が続く。読書は彼の自己同一性を保証しうる重要な行為であったはずだ。平岡夫婦の帰京後であっても、三千代に再会する前の代助は、アンドレーエフの『七刑人』を読み切ると、頭が「最後

の幕で一杯になつてゐる」(四)ものだ。しかし、三千代に二度目の金を与え、縁談の相手、佐川の娘を見送つた後の代助は、本が読めなくなつてゐる。しがみつくように「約二時間程」読もうと努めたものの、「仕舞にとうく堪へ切れなくなつて」、書物を「伏せて」(十三)しまふ。

奇妙なことに、この二度にわたる読書の失敗の間に、彼は読書家であつた学生時代の友人が、山林での家族生活に流され、書物を「読んでも解らなくなつた」ことについて、「自分と同じ傾向を有つてゐた此旧友が、当時とは丸で反対の思想と行動に支配されて、生活の音色を出してゐる」(十一)と考えるが、本が読めなくなつた自分自身をこの友人に重ねてみることはない。代助は相変わらず読書家としての立場に立つて、この友人の変化を眺めているのである。

代助はもはや自分を見ることができない。縁談を断る決意をした代助は実家に行く前に、床屋に行く。「代助は床屋の鏡で、わが姿を映しながら、例のごとくふつくりとした頬を撫で、今日から愈々積極的生活に入るのだと思つた。」ところが、実家の嫂、梅子は、「眼を寄せて代助の顔を覗き込んで」、「少し瘡めた様」、「色沢が悪るい」、「蒼い」(十四)と指摘する。かつて代助が「内容の多い時間」を有していた頃、職探しに疲れた平岡から、代助の日本批判は「自分の顔を鏡で見る余裕がある」者の意見だと言われ、「忙しい時は、自分の顔の事なんが誰だつ

て忘れてゐる」(六)ものだ非難された。しかし、数ヶ月後、床屋の鏡の前に座つた代助は「自分の顔を鏡で見て」も、正しく認識できなくなつてゐる。逆算された「過去」の恋が代助の現在を壊してゆく。焼き焦がしてゆく。

たしかに、かつて代助の自己同一性は読むことであつた。彼は物語を批判的に読む人であり、物語を読むように社会を眺める人であつた。自らの読む物語とも、生きる現実とも離れた別のところに、自らの(いま、ここ)を設定していた彼は、物語とも現実とも同一化しないこと、すなわち(viii admirari)の地平に自らの自己同一性を求めていた。そうした代助にとつて認めることのできる(いま、ここ)の現実があるとすれば、それは唯一、自身の美しい身体とそこに脈打つ心臓の鼓動であつたはずだ。「胸に手を当てた儘、此鼓動の下に紅の血潮の緩く流れる様を想像し」、それを「今流れる命」とも「自分を死に誘ふ警鐘」(二、七)とも感じながら、彼は朝の蒲団に身を横たえたまま、自らの生と死の生々しさにたじろぐのであつた。彼が赤い色を忌み嫌つたのは、したがって、それが生と死を荒々しく彼に突きつける血の色であつたからだ。しかし、(viii admirari)の地平から追い立てられ、三千代との愛、三千代との再現の昔を生きたことを決意した代助にとつて、自らの美しさもはや問題でないのと同様、生も死もはや恐れるには足らない。むしろ死が恋人たちを高揚させる。じつさい、最終章におい



て、代助にも、私たちにも、三千代が生きているのか死んでいるのかさだかではない。

代助は「一寸職業を探して来る」と言つて、「傘も指さずに日盛りの表に飛び出」す。半ばまどろんでいる感覚の中で、一つのものが拡大され、スローモーションのように映像化される最初の朝とは反対に、物語の最後では、町中の赤いものが、「代助の頭の中」に次々と、早廻しのように、ぐいぐいと強引なスピードで「飛び込んで」くる。「仕舞には世の中が真赤に」なり、代助は「自分の頭が焼け尽きる迄電車に乗つて行かうと決心」(十七)するのだ。かつてはあんなにも恐れ嫌っていた赤い色と彼はひとつになる。

(注)

- (1) 夏目漱石、『それから』、漱石文学全注釈、若草書房、二〇〇〇年、以下同様。
- (2) 石原千秋、『反転する漱石』、青土社、一九九七年、二二二頁。
- (3) 中山和子、『それから』——〈自然の昔〉とは何か——、『國文學』解釈と教材の研究、一九九一年一月号、六四〜六六頁。
- (4) Abbé Prévost, *Histoire du Chevalier Des Grieux et de Manon Lescaut*, ed. Garnier Frères, coll. Selecta, Paris, 1957, p. 20.
- (5) 前掲書、六五頁。
- (6) Jean-Jacques Rousseau, *Discours sur l'origine et les fondemens de l'inégalité parmi les homes*, O.C., III, Bibliothèque de la Pléiade, 1996, p. 123.
- (7) Jean-Jacques Rousseau, *Emile*, O.C., IV, Bibliothèque de la

Pléiade, 1996, p. 248.

- (8) 吉田精一、『ルソーと日本の近代文学』、『現代思想』、一九七四年五月号、九一〜九七頁。
- (9) 石原千秋、『漱石の記号学』、講談社、一九九九年、六二頁。
- (10) 小森陽一、『代助と新聞——国民と非国民の間で』、『漱石研究』、翰林書房、一九九八年、第十号、七一〜八三頁。
- (11) 小谷野敦、『妾の存在意義——それから』をめぐって』、『漱石研究』、翰林書房、一九九八年、第十号、一二四〜一三五頁。

## Le passé re-produit

—Re-cr  er un roman dans *Sorekara*—

Yoko MIYAMOTO

**Abstract**

Daisuk   et Michiyo s'aiment, jusqu'  , peut-  tre, que folie s'ensuive. Mais cet amour n'appartient plus    la premi  re jeunesse. Daisuk  , trentenaire c  libataire, entretenu par sa riche famille, est press   de se marier dans l'int  r  t du clan familial. En effet, son p  re voudrait se retirer des affaires une fois que son petit-fils,   g   de 15 ans, sera suffisamment m  r pour succ  der    son propre p  re, fr  re a  n   de Daisuk  . Ce dernier, jusque-l   h  ritier en r  serve, en tant que fils cadet, perdra alors sa position familiale au cours de cette alternance des g  n  rations. D'autre part, Michiyo, l'  pouse du meilleur ami de Daisuk  , est une femme malade, qui vit dans les regrets de la perte de son enfant, qui souffre des dettes de son mari. Le couple, mari   par l'entremise de Daisuk   trois ans auparavant, entretient une relation plut  t froide.

Depuis l'  poque o   elle   tait jeune fille, Michiyo aimait Daisuk  , lequel, de son c  t  , se montrait relativement indiff  rent.    pr  sent en revanche, alors qu'il est lui-m  me    un tournant crucial de sa vie, Daisuk   s'int  resse    Michiyo plong  e dans la mis  re, pour laquelle il est l'unique recours. La r  alit   de leur amour ne fait aucun doute, cependant elle est conditionn  e par leur situation respective, et au fond, ce que l'un et l'autre souhaitent et esp  rent, c'est re-produire leur pass   au travers d'un roman d'amour innocent, propre au temps de la toute premi  re jeunesse, et peut-  tre imaginent-ils le vivre en   change, ou en compensation, de leur vie pr  sente.